

## マンガ・研究・博士—京都精華大学マンガ研究科博士後期課程開設記念シンポジウム—

日時：2011年10月22日（土）14:30-17:30

場所：京都国際マンガミュージアム 3F 研究室1

司会：吉村 和真

### 1) 機能マンガをマンガ研究に用いる理由（竹宮 恵子）

概要：実作者としてマンガ研究に相對している、マンガの機能を分解して教えたい。マンガの正体を解き明かす必要十分条件は、機能マンガの中にあると信じる。オリジナルのマンガ作品を描くこと以上に難しいのは、注文された課題に注文以上に答えることだ。注文以上に深く豊かな表現を持って答え、オリジナル作品にも匹敵する作品を作るというのはどんなことか...実作の中で伝えたい。

### 2) マンガ「実技理論」を模索する（都留 泰作）

概要：

マンガの実技者の博士研究を支援する上で、マンガ「実技理論」が確立されれば有用であろう。「マンガ」を対象としたアカデミックな研究領域は、ある程度確立しつつあるが、より実技者の観点に即した「マンガ実技理論」は、いかなる形のものになるのだろうか？このような観点から、発表者自身の人類学における儀礼研究、マンガ実作の試み、さらにマンガの実技理論構築に向けての試作的な研究について振り返る。

### 3) <絵>の<声>の聴き方（姜 竣）

概要：

マンガとは何かと、その表現の存立構造を問うには、周辺の表現形式との境界を見極めることも有効である。1940～60年代、街頭紙芝居の流行、絵物語ブーム、赤本や貸本の盛衰、マンガ週刊誌時代の幕開けが相次ぐ中、多くの紙芝居作者たちがマンガの世界に活路を求めた。水木しげる、白土三平のように転身を果たし、大成功を収めた者もあれば、わずかな仕事を残して消えた者も少なくない。マンガになる、ならないという分岐を見極めることで、紙芝居の観点からマンガという表現の境界を覗いてみたい。

### 4) 「マンガ（非）芸術論」（ジャクリーヌ・ベルント）

概要：

本マンガ研究科は、芸術大学である京都精華大学に位置し、「芸術」の学位を授与する機構である限り、マンガが芸術と如何なる関係にあるかを論考の対象とせざるを得ない。この問題は国内で「表現」の名において処理されやすいかもしれないが、

国際交流の際（相手がフランスであれ韓国であれ）マンガが「芸術」という近代的制度および言説と関連づけられることが多い。それは、マンガが、サブカルチャーを超えて広義の「社会」あるいは〔国民〕文化のために如何なる役割を果たしうるかへのこだわりをも含むが、表現形式自体、特にそれがもたらす特殊な意味合いへの注目にも当てはまる。本報告では、「芸術」の名において主張されてきた文化的正当性に固執せずに「マンガ（非）芸術論」を追求する。